# 悠久のインダス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悠久のインダス

【Ｎコード】
Ｎ９０７９Ｓ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
隼人は日本からインドに来た。その彼がインドで見て知ったことは。インドは本当に凄い国です。スケールが違います。

# 第一章

悠久のインダス

「とんでもない国だよな」
「そう思いますか」
「ああ、思う」
彼は真顔でガイドに答えていた。彼、矢吹隼士は今インドにいる。茶色の癖のある細い毛の髪を女の子の髪型で言うショートにしている。目は一重でアーモンド型で横にある。細面で唇は少し厚い。薄めの鱈子にも見える。背は一七六程で高いと言えばまあ高い。全体的にすらりとしている。
服はジーンズにシャツ、それにリュックという旅行者とすぐにわかる格好だ。彼はそのインドの人がやたらと多い町の中でこう言ったのである。
「だから何だよこの町」
「インドの町ですが」
「それはわかるけれどさ」
それでもだというのである。
「だから何でこんなに人が多いんだよ。中国より多いじゃないか」
「人口二十億ですから」
ガイドの言葉はとんでもないものだった。
「ですからこのニューデリーもです」
「二十億って。本じゃあ十一億ってあったよ」
「数字には多少の間違いがつきものです」
「十一億と二十億じゃあ全然違うだろ」
「些細な違いだと思いますが」
「全然違うよ。九億も違うじゃないか」
隼士は日本人の観点から語る。その彼の周りに子供達が群がってくる。そうしてそれぞれ様々な言葉で彼に言ってくるのである。

その子供達を見てだ。彼は怪訝な顔でガイドに尋ねた。ガイドもまた子供たちに囲まれている。それは群がるといった感じであった。
「この子達ってまさか」
「はい、物乞いです」
それだというのである。
「先祖代々、由緒正しい真面目な物乞いの子供達です」
「そういうカーストなんだよな」
「その通りです」
インドでは三千程度のカーストがあると言われている。それは代々受け継がれるもので物乞いのカーストも存在しているのだ。
「ですからここはです」
「ああ、わかったよ」
彼は早速財布を取り出した。それでコインを子供達に一枚ずつ与えるのだった。どれも空港で両替して手に入れたものである。
それを渡しながらだ。彼はガイドに言うのであった。ガイドは当然インド人である。浅黒い肌に彫の深い顔、それに口髭である。ターバンまでしている。誰がどう見てもインド人の格好で彼の横にいるのだ。
「これでいいんだよな」
「はい、これが彼等の仕事ですので」
「先祖代々の」
「そういうことです。それでは」
「行くんだよな、ホテルに」
「この通りをまっすぐです」
ガイドは前を指差す。しかしその道は。
人、人、人であった。道なぞ見えずいるのは人だけであった。
その道を見てだ。隼士はまた言った。
「道だよな」
「はい、道です」
「人だけで道が見えないんだけれどな」

「そうですか？」
「そうだよ。っていうか」
彼の言葉がここでうわずったものになった。
「何だよ、人だけじゃないじゃないか」
見れば牛もいた。道を普通に歩いている。それも何匹もだ。
「話には聞いてたけれど実際に牛が普通に町を歩いてるのかよ」
「普通の光景ですが」
「インド以外じゃ全然普通じゃないよ」
「ここはインドです」
身も蓋もない言葉であった。
「ですからこれでいいのです」
「インドなんだな」
「そうです。インドでは牛は神聖な動物です」
ヒンズーの教えによる。
「だからいいのです」
「ううん、牛が普通にか」
話を聞いてもだ。まだ信じられないといった顔の彼であった。
「実際に見るとびっくりするよな」
「人と牛が共に暮らしている。いいと思いませんか」
「俺も牛は好きさ」
彼もそれは認めた。
「けれど。畑や牧場にいるのじゃなくてか」
「畑にも勿論いますよ」
「町にいるのは凄いよな」
「私も驚きました」
ガイドもだというのだ。
「他の国では町に牛が一匹もいないのですから」
「それが普通だろ」
隼士はまた日本の常識から述べた。

## 第二章

「どう考えてもな」
「認識に違いがありますね」
「そうだよな」
このことはお互いがよくわかった。実によくだ。
「まあなあ。インドの話は聞いていたけれど」
「予想以上ですか」
「聞くのと見るのとじゃ大違いだな」
「百聞は一見に如かずですね」
ガイドはにこにことして彼にこう言ってきた。
「日本の諺ですね」
「そうだよな。それじゃあ」
「お腹が空きましたし何か食べられますか？」
「ああ、そうだな」
隼士はガイドのその提案に素直に頷いた。
「それじゃあここは」
「何を食べられますか？」
「何をってカレーしかないだろ」
彼はすぐにガイドにこう返した。
「それ以外な」
「いえいえ、それが違います」
「カレー以外にあるのかよ」
「牛肉のカレーはありません」
インドでは牛は食べない。ヒンズーの聖なる動物だからだ。それを食べるということはこの国においては考えられないことなのだ。
「それはご承知ですね」
「知ってるよ、やっぱりさ」
隼士もであった。それはよくわかっていた。インドのことを聞い

ているからだ。
「だからそれはもう」
「おわかりですね」
「ああ、それはさ」
そうだとまた答える彼だった。
「よくな」
「そしてです」
ここでさらに言うガイドであった。
「鶏肉のカレーに羊のカレーに野菜のカレーに魚のカレーに卵のカレーにです」
「だから全部カレーだろ」
「種類は一杯ありますね」
「だから全部カレーじゃないか」
「それが何か？」
ガイドは隼士の主張を全く理解していないようであった。
「おかしいですか」
「いや、もういいさ」
流石にだ。こう返されては隼士も言い返しようがなかった。項垂れた顔になってだ。そのうえでガイドに対して述べたのであった。
「まあインドに来たんだしな」
「カレーですね」
「だからそれしかないじゃないか」
こうは言ってもだった。彼はそのカレーをガイドと共に食べるのであった。インドだけあって手で食べるカレーであった。それを食べ終わるとだ。
今度は車でニューデリーの外に出た。そこは農村だった。
田で人々が働いている。それはのどかな光景だった。しかしだ。
そこにもだ。やはり牛がいた。彼等は人と共に働いていた。それを車の中から見てだ。隼士はまたガイドに話をするのだった。
「なあ」

「はい、どうしました？」
「ここでも牛なんだな」
車はガイドが運転している。その車は中古の日本車だ。その車はことことと揺れている。それは道が舗装されていないからである。
その車に揺られながらだ。彼は言うのだった。
「インドは」
「いいものですね」
「牛尽くしの国なんだな」
「つまりあれです」
「あれって？」
隼士は助手席からガイドに問うた。
「あれっていうと？」
「我が国は常に神々と共にあるのです」
「牛が神の使いだからか」
「牛には何億もの神がいるのです」
物凄い数であった。
「そして神の乗り物でもありますし」
「何億か」
「はい、何億もです」
「日本の神様より多いんじゃないのか？」
また言う隼士だった。日本もまた実に多くの神々がいる。八百万の神々がいるということは彼もまたよく認識していたのである。

## 第三章

しかしだ。何億と聞いてだ。彼も唖然となったのである。
「牛一匹にそこまでいるのかよ」
「はい、全ての牛にです」
「インドって凄いな」
素直に出た賞賛の言葉だ。
「日本じゃお米に神様がいるけれどな」
「お米に何億もいるのですね」
「一粒一粒に何億も神様がいたら食えるかよ」
流石にそれは否定した。
「どんだけ賑やかなんだよ」
「いえ、それだけ有り難いということで」
「そうなるのかよ」
「私はそう考えますが」
「悪いけれどそれは違うからな」
それはないというのであった。
「ただな」
「はい。ただ？」
「それがインドなんだな」
ここでもこのことをよく認識することになった。
「そうなんだな」
「はい、インドです」
「凄い国だな」
また言う彼であった。
「いや、それはわかるよ」
「インドですから」
それでだというのだ。
「そうなります」

「インドなんだな」
「はい、インドです」
「俺さ。今までさ」
隼士は車窓からだ。その田と旗らく人達と牛を見ながら話した。田も何処か日本とは違う。微妙、いやそれ以上にだ。違っていた。
「色々な国を旅行してきたんだよ」
「インドは今までは」
「はじめてだよ」
「だから驚かれてるのですね」
「そうだよ。話には聞いていたさ」
またこう言う彼であった。
「けれどそれでもな」
「驚かれますか」
「驚かない奴なんているのかよ」
「そこがわからないのです」
ガイドはここでいぶしんで首を捻るのだった。
「私にとっては」
「ガイドさんにとっては」
「そうです。わからないのです」
そうだとだ。隼士に話すのだった。
「インドに来て。誰もが驚かれるのです」
「インドが凄過ぎるんだろ」
「はい、皆さんそう仰います」
「っていうか自覚ないのかよ」
「自覚とは？」
「いや、もういいから」
隼士も負けてしまった。車の中ではそれ以上は話さなかった。そのうえで車の向かう場所に向かっていた。そうして辿り着いた場所は。
そこは寺院だった。石造りで屋根の先が三角になっている。その

寺院だった。
寺院の入り口には腕が十本ある女神の像がある。それは。
「何かおっかない顔をしているな」
「それもよく言われます」
見れば目が吊り上がり舌が出されている。口には牙がありその手にはそれぞれ武器があり。他のものまであるのであった。それは。
「人間の首じゃねえかよ」
「神々と争った巨人の首です」
ガイドはそれだというのである。
「それです」
「巨人か？」
「その手も髑髏もです」
見れば女神のスカートは人間の手が連ねられている。ネックレスは髑髏が連ねられている。そうしてみると実に凄惨な姿である。

# 第四章

「巨人のものです」
「巨人か」
「はい、そしてこの女神はです」
「何ていう女神なんだ？」
「カーリーといいます」
それがその女神の名前だというのだ。
「それがこの女神の名前です」
「カーリーか」
「我が国の、ヒンズーの神々は御存知ありませんでしたか」
「そっちには詳しくないんだよ」
こう話す隼士だった。首を傾げさせていた。
「ちょっとな」
「成程、神話はですか」
「ああ。あまりな」
また答える彼だった。
「造詣が深くなくてな」
「そうですか。では仕方ありませんね」
「悪いな」
「いえいえ、謝る必要はありません」
ガイドはそれはいいとした。
「それでこの神ですが」
「説明してくれるか」
「それが私の仕事ですので」
ガイドのだというのだ。職務に実に忠実である。
「ですから」
「それじゃあ頼めるか？この女神は何なんだ？」
「戦いの女神です」

それだといのである。
「破壊神シヴァの妃の一人にして破壊と殺戮の女神です」
「破壊と殺戮！？」
それを聞いてだ。隼士の顔が一気に強張った。
「それってまずいだろ」
「えっ、まずいですか？」
今度はガイドがきょとんとなった。
「それが」
「いや、破壊と殺戮だろ」
彼が言うのはこのことだった。
「じゃあこの女神って邪神か」
「いえ、邪神ではありません」
ガイドはそれはすぐに否定した。
「間違ってもです。邪神の類ではありません」
「けれど破壊と殺戮だろ？」
「はい、それはその通りです」
「じゃあ邪神じゃないか」
「破壊は世界にとって必要なものです」
そうだとだ。隼士に話すガイドであった。
「創造、調和と並んで」
「その二つはわかるけれどな」
「破壊はわかりませんか」
「それって必要か？」
隼士は眉を顰めさせながらガイドに問い返した。
「何もかもぶっ壊すんだよな」
「その通りです」
「何でそれが世の中にとって必要なんだよ」
「ですから。何もかもを壊してそのうえで創り出すものですから」
ガイドの言葉は何時しか極めて哲学的なものになっていた。それはまるで僧侶が宗教を語るような、そうした宗教的なものすらあっ

た。
「だからなのです」
「それでかよ」
「はい、ですから破壊はです」
ガイドの言葉が続けられる。
「いいことなのです」
「じゃあこの女神様もか」
「はい、善神です」
そうだと。隼士にはっきり言い切るのであった。
「悪しきものを破壊し殺戮するのですから」
「だから善神か」
「おわかりになって頂けたでしょうか」
「いや、全然」
それははっきりと否定する彼だった。
「話は聞いたが理解なんてできねえよ」
「左様ですか」
「けれど。それがインドなんだよな」
いぶかしみながらもこうガイドに述べた。

# 第五章

「そうなんだよな」
「はい、その通りです」
「それはわかったよ」
また言う隼士だった。
「それだけはな」
「では中に入られますか？」
ガイドは今度はこう言ってきた。
「今から」
「ああ、それじゃあな」
隼士も断らなかった。そうするというのだ。
「中に入ろうか」
「別に怪しい儀式とかは行われていませんから御安心を」
「人間を生贄にしてるとかはないよな」
「ははは、まさか」
それはないというのだった。
「そうしたことは流石にありません」
「だよな、やっぱりな」
「ただ」
しかしだ。ここで彼はこう隼士に話した。
「サッグという組織が昔ありまして」
「サッグ？」
「はい、ご存知ではないですね」
「何だそりゃ」
サッグと聞いてだ。隼士は思わず問い返した。
「組織って。怪しい組織かよ」
「カーリー神を信仰する団体でして」
「つまり宗教団体なんだな」

「はい、カーリー神への生贄としてです」
「やっぱり生贄あったのかよ」
隼士はそれを聞いて自分の予想通りだと思った。しかしそれで嬉しいわけではなかった。生贄と聞いてそう思える筈がなかった。
「それでどういう組織なんだよ、生贄って時点でやばそうなんだけれどな」
「人を後ろから襲い首を絞めて殺します」
物騒な話が出て来た。
「そしてそれを生贄として捧げるのです」
「おい、そんなやばい組織があったのかよ」
「そうです。イギリス統治時代に掃討されましたが」
「まだ残ってるとかはねえよな」
「多分」
今一つはっきりしない返答だった。
「もういないかと」
「やっぱり人間生贄に捧げていたのかよ」
「はい、過去には」
「本当に今もういないよな」
隼士はそれを確認せざるを得なかった。そうでないとても落ち着けなかった。生贄と聞いたことがとにかく大きかった。それでだ。
「その組織の連中」
「ですから多分」
「多分って何だよ、多分って」
「完全な崩壊をしたかどうか。この目で確かめていませんので」
「そんなの一番最初に確認しろよ。今でもいたらやばいだろ」
こんな話をしながらカーリー女神の寺院に入る。中はサッグの話とはうって変わってまともなものだった。隼士も安心するものだった。
その日二人は別の街のホテルで休んだ。その翌朝であった。
二人は向かい合ってカレーを食べている。ホテルのすぐ傍の店で

だ。手でカレーを食べながらだ。ガイドは隼士に対して問うた。
「カレーは平気なのですね」
「カレーは大好きなんだよ」
こうガイドに答える彼だった。
「日本でもカレーよく食うしな」
「ああ、あれですか」
ガイドは日本とカレーという二つの言葉を聞いてからこう述べてきた。
「あの変わった和食ですね。あれも美味しいですね」
「変わった和食！？」
「はい、和食です」
こう隼士に言うのである。

# 第六章

「日本にいた時にかなり食べました」
「いや、あれはな」
「あれは？」
「あれはインド料理だろ」
隼士は怪訝な顔でガイドに話した。
「どう考えてもな」
「いや、あれは和食でしょう」
「だからインド料理だろ？カレーは」
「確かにカレーに似せていますがカレーではありません」
ガイドは手でカレーを食べながら冷静に述べる。
「また別のものです」
「そうか？」
「そう思いますが違いますか」
「だからあれはインド料理だろ」
話がわからずだ。こうガイドに言う彼だった。
「どう見てもな」
「では今召し上がられているカレーですが」
ガイドは今度はこう言ってきた。
「日本のカレーと同じでしょうか」
「同じって」
「それはどうでしょうか」
「いや」
自然とだ。否定の言葉が口から出た。
「それはやっぱりな」
「違いますね」
「ああ、全然別物だよ」
「そういうことです」

ガイドは落ち着いた声で話してきた。
「これがカレーです」
「じゃあ日本のカレーは」
「はい、変わった和食です」
またこの言葉を話すのであった。
「私はそう思います」
「そうか。あれはカレーじゃないのかよ」
「カレーであってカレーではありません」
この言葉も再び出すのだった。
「別のものです」
「インド料理じゃなくて和食なんだな」
「洋食と同じですね」
「カレーも洋食だけれどな」
「あれは西洋の料理を元にしていますね」
「ああ」
今度は肯定できた。はっきりとだ。
「明治の頃にか？ああした料理ができたんだよ」
「コロッケやスパゲティナポリタンやハンバーグ」
「それとそのカレーもな」
「全て西洋の料理とは全く違ってきています」
その洋食はというのである。
「だからです」
「あれも日本の料理っていうんだな」
「そういうことです」
「何かわからない考えだな」
首を傾げて言う隼士だった。彼もまたカレーを手で食べている。
しかしその手の使い方はガイドのそれに比べるとややぎこちなくはあった。
「全然な」
「左様ですか」

「そもそもあれだろ？」
ここで彼はガイドにこんな話をしてきた。
「お釈迦様な」
「ゴーダマ＝シッダルタですね」
「あれだよな。こっちの神様の生まれ変わりってなってるんだよな」
「はい、ヴィシュヌ神のです」
インド三大神の一柱であり調和神である。ヒンズー教においてかなりの信仰を集めている。
「その生まれ変わりの一つです」
「それもわからねえよ」
「そうですか？」
「しかも仏教ってヒンズー教の一派になるんだよな」
「はい」
ガイドは疑うことないといった言葉で答えた。
「その通りです。ヴィシュヌ神の生まれ変わりの一つなので」
「それがわからねえんだよ」
隼士はカレーを食べながら話す。

# 第七章

「どういう話なんだよ、一体」
「ですから。生まれ変わりですので」
「それはわかってもだよ」
「何がおわかりになられないのですか？」
「何で仏教がヒンズー教の一派なんだよ」
彼が言うのはこのことだった。
「それって滅茶苦茶な話だぞ、おい」
「そうでしょうか」
「俺はそう思うけれどな」
「私はそうは思いませんが、特に」
「特にかよ」
「はい、全く」
まさにそうだというのである。
「何処かおかしいでしょうか」
「気付かないんだったらもういいよ」
彼も次第に諦めてきた。そうしてであった。
彼等はカレーを食べてからだ。今度は別の場所に向かった。聖地ベナレスにである。
そこに着いてだ。隼士はまた唖然となった。河を見てだ。
河は汚れていた。様々なものが流れてくる。ゴミもあれば他のものもだ。しかもその河の中でだ。人々はにこやかに沐浴しているのだ。
それを見てだ。彼はまた言った。
「これも話には聞いていたよ」
「左様ですか」
「けれどな。実際に見るとな」
「如何でしょうか」

「汚いだろ、この河」
こうガイドに話す。河を指差しながら。
「誰がどう見てもな」
「いえ、ここはこの世で最も清らかな河です」
「何処がなんだよ」
「この世のあらゆる穢れを洗い流す河です」
「あんなにゴミが流れてるのにかよ」
「そうです。それがこの河です」
ガイドはここでも落ち着いて話す。
「そうなのですが」
「それもヒンズー教の教えかよ」
「その通りです。それでどうでしょうか」
「どうでしょうかって。何がだよ」
「貴方も沐浴されますか？」
温厚そのものの言葉でだ。隼士に尋ねるのだった。
「この河で」
「本気で言ってんだよな、それは」
「はい、本気です」
まさにその通りだというのだ。
「私はこれからそうさせてもらいますが」
「いいよ、俺は」
きっぱりと断った。完全な否定の言葉だった。
「別にさ」
「左様ですか」
「ああ。ガイドさんだけで行ってきたらいいよ」
「わかりました。それでは」
ガイドはだ。隼士にそう言われてだ。すぐに服を脱ぎだした。そうしてそのうえでだ。実際に河で沐浴をしてきた。そうして彼のところに戻ってきてだ。満足した顔で話すのだった。
「実は今までここで沐浴したことはなかったのです」

「そうだったのかよ」
「はい、ですから」
「満足したんだな」
「願いが適いました」
その満足した顔での言葉である。
「いや、よかったです」
「ガイドさんが満足してるんならいいけれどな」
「あらゆる穢れが洗い落とされた気持ちです」
「そうか？」
隼士はガイドの今の言葉には甚だ懐疑的だった。ガイドはもう身体を拭き服を着ている。しかしなのだった。
匂いがした。それがどうしても気になる。それで彼は言うのだった。
「匂いがするんだけれどな」
「匂いですか」
「ああ、河の匂いだよ」
何とも言えない匂いであった。
「その匂い、酷いな」
「そうでしょうか」
「そうだよ。まあガイドさんが満足してるんならいいけれどな」
「はい、とても満たされています」
「だったらいいよ」
また言う彼だった。
「それじゃあな」
「次はですね」
「何処に行くんだ？」
「街を歩きましょうか」
そのベナレスの街をだというのだ。

# 第八章

「そうされますか」
「ああ、そうだな」
隼士はガイドのその提案に頷いた。そうしてだった。
二人でそのベナレスの街を歩く。そこで彼はまた牛を見たのであった。
あまりにも多い人ごみの中に普通に牛がいる。かつては有り得ないと思った光景である。しかしであった。
今見ればだ。それが普通のものに感じられるのだった。それでだ。
「なあ」
「はい、何か」
「ニューデリーで見た時はな」
「牛ですか」
「すっごい有り得ないって思ったよ」
こう話すのだった。
「けれど今はな」
「違いますか」
「自然に思えてきたな」
首を傾げながらでもだ。言うのであった。
「何かな」
「左様ですか」
「自分でもどうしてかわからないさ」
それを言う彼だった。
「けれどそれでもな」
「思えてきたのですね」
「慣れてきたのか？」
まずはこう考えた彼だった。
「これってよ」

「違うと思いますよ」
しかしガイドはそれは否定したのだった。
「それについては」
「じゃあ何なんだ？」
「私はこれまで多くの外国の方をこうして案内してきましたが」
ガイドなら当然のことだった。しかし彼はここであえてこのことを話すのだった。
「ですがどなたもです」
「俺みたいなこと言うのかよ」
「はい、そうです」
その通りだというのである。
「そしてそれはどうしてかというとです」
「何でなんだ？それで」
「インドのこの悠久を知ったからです」
それでだというのだ。
「この様々なものが内包されている悠久をです」
「悠久か」
「はい、悠久です」
「これが悠久っていうのか？」
「私はそう思いますが」
「悠久じゃないんじゃいのか？」
隼士はいぶかしみながらこう言うのだった。
「悠久っていうと時間の話だろ」
「インドは何千年も前からこうですが」
「何千年か」
「インドの歴史は何千年です」
この歴史の長さは隼士も知っていた。その歴史の長さでも有名な国だからだ。彼もそれに興味を持ってインドを今回の旅行に選んだのである。
「ですから」

「何千年も前からこんなのかよ」
「確かに現代文明も入っています」
それは否定しなかった。インドは近頃経済成長もめざましいのだ。
「ですがそれでもです」
「牛はずっといるのかよ」
「そして神々も。河もです」
「どれもあるんだな」
「勿論カレーもです」
それもだというのだ。
「全て。このインドの中にあるのです」
「悠久のこの中でか」
「それがインドなのです」
「物凄い国だな」
思わずこう言ってしまった彼だった。
「インドってのはな」
「それもよく言われます」
「本では読んだよ」
またこのことを言う。

# 第九章

「けれどな。実際に見るとな」
「そうですね。全くですね」
「ああ。凄い国だよ」
言葉が自然に口から出ていた。
「インドってのはな」
「そう言って頂けて何よりです」
「褒め言葉か？今の俺の言葉って」
「私はそう受け取りました」
ガイドは微笑んでそうだと返すのだった。
「いや、そう言って頂けてガイド冥利に尽きます」
「そうか。それならいいけれどな」
「はい、それでなのですが」
「それで？」
「これからどうされますか？」
これからのことをだ。隼士に尋ねるのだった。
「今のところこれといって予定はありませんが」
「そうだな。それじゃあな」
隼士は少しだけ考えてからだ。こうガイドに話した。
「この市場をな」
「行かれますか」
「ああ、牛に人な」
牛が第一であった。
「見たくなったよ。もっとな」
「はい、それでは」
「それにな」
見たくなったものはだ。まだあった。
「市場だからな。何が売られてるかもな」

「御覧になられたいのですね」
「ああ、インドじゃどんなのが売ってるんだ？」
「それこそ色々なものが」
売られているというのである。
「ありますよ」
「色々な、か」
「香辛料もあれば」
インドといえばこれである。かつて大航海時代にはポルトガルやスペインの者達が命懸けでこの国まで来てだ。香辛料を手に入れていたのである。特に胡椒をだ。
「その他のものもです」
「だよな、やっぱりな」
「そうしたものも御覧になられますか」
「ああ、是非な。できれば」
さらにだ。彼は話した。
「そうしたものも買いたいな」
「わかりました。それでは」
「インドか」
隼士はだ。自然に微笑みになっていた。
「それを見てみたくなったよ」
「でしたらこの旅行でもっと色々な場所を巡られますね」
「ああ、そうしたいな」
実際にそうするというのだった。
「それじゃあな」
「はい、それでは」
こうして隼士はガイドと共に市場に入りだ。様々な人々、そして牛達を見て市場の中にあるものを覗き込みそこにあるものを買った。
マンゴーも買った。それを食べてみて満足して言った。
「美味いな」
「そうでしょう、果物も」

「カレーばかりじゃないんだな」
「お菓子もありますよ」
それもあるとだ。ガイドは話してきた。
「どうですか、それも」
「どんなお菓子だよ、それで」
「はい、ミルクを使ったお菓子でして」
そうしたものだというのだ。
「それはどうですか？」
「ああ、それじゃあ」
「それもですね」
「食べさせてもらうよ。カレーばかりでも」
それでもだとだ。隼士はさらに話す。
「そうした菓子だってあるんだな」
「そうですよ。インドのお菓子は」
それはどうかとだ。ガイドはこのことについても話した。

# 第十章

「物凄い甘さですから」
「マンゴーだって甘いよな」
「お菓子はそれよりも遥かにです」
「それじゃあそういうのもな」
「楽しんで下さい」
こうしてだった。その菓子も食べるのだった。その甘さは確かにかなりのものだった。それこそ頭が痛くなるまでに、そこまで甘かった。
その甘さを味わってからだ。隼士はまたガイドに話した。
「凄かったな」
「美味しかったですよね」
「っていうか甘かった」
味わった味覚をそのまま言うのだった。
「もう滅茶苦茶に」
「そこまでですか」
「っていうか何だよあの甘さ」
「インドのお菓子ですので」
「インドの菓子ってどれもあんなに甘いのかよ」
「カレーは辛いですから」
それが理由だというのだ。カレーの辛さがだ。
「ですからそれに釣り合うにはです」
「菓子も甘くないと駄目ってことか」
「そういうことです。それもまた」
「インドなんだよな」
「それでどうでしたか？」
ガイドはにこりと笑ってまた隼士に尋ねてきた。
「美味しかったですか？」

「まあな」
それはその通りだというのだ。
「それはな」
「はい、それは何よりです」
「インドのカレーも」
隼士はカレーの話もした。
「美味かったけれどな」
「そうでしょう。あれこそがインドの味です」
「菓子も含めてか」
「全てが」
カレーも菓子も。他のものも含めての言葉だった。
「インドなのです」
「そういうことか」
「そうです」
こうだ。笑顔で隼士に話すのだった。これも彼がこの旅で知ったことだった。
そうして旅が終わりに近付きだ。ニューデリーの空港に向かう車の中で。彼は車を運転しているガイドにこう尋ねられたのだった。
「一つ御聞きしていいでしょうか」
「何がだよ」
「インドはどうでしたか？」
そのインドがだというのだ。
「我が国は」
「また来たいな」
彼は前を見ながら答えた。助手席からだ。
「この国にな」
「そう思われますね」
「ああ、いい国だよ」
自然とだ。この言葉が出た。
「本当にな」

「それではまたですね」
「ああ、また来るからな」
また言ってだ。そしてだ。
隼士は目の前にいる人々の中に混ざって街を歩く牛を見ながらだ。ガイドに話した。
「その時はまたな」
「はい、宜しく御願いします」
「今度は別の場所も巡りたいな」
来ると決めているからこそ。出た言葉だった。
「インドのな」
「ええ、インドならお任せ下さい」
「何でも知ってるってか」
「そうです。ですから」
「ああ、じゃあ次は」
その時はと。隼士は自分から話した。
「宜しくな」
「ええ、こちらこそ」
二人は微笑になっていた。その微笑で話をするのだった。そうして隼士はまたこの国に来ようと。自分の心に強く誓うのだった。悠久の中で。

悠久のインダス　　完

２０１０・１２・３１

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9079s/

---

悠久のインダス

2011年5月1日22時25分発行